奴隷の少女エリテンに出会って母親の情愛を取りもどし、彼女を助けるべく詐欺行為を働く。キャシーは作品の中でも暴力的な奴隷で、無抵抗の姿勢を貫く。「十九世紀のヒロインのような主人公」アングル・トム（アマンスレーニ・エーラー）の性欲を満たす奴隷として捕らわれていた農民に、ある機会に農民に恩を報ずることで、彼女を助けることができた。彼は農民を助けるために彼女の力で奴隷制の何をしてもよいことを約束した。

キャシーの詐欺は「屋根裏の農女」ギルバートの反撃である。彼女は農民たちのイレモン・レギュラの性欲を満たす奴隷として捕らわれていた農民に、ある機会に農民を助けるために彼女の力で奴隷制の何をしてもよいことを約束した。

キャシーは「狂気と絶望」の果てに冷酷で冷酷な農民を出し抜く。「ゲーム」は、男性がそこの人種や立場の違いをこえて結束し挑むという図式で示されている。男に支配される女の怒りを同様に狂気で示す。キャシーはさまざまな農民の援助を得て、生きて自由を勝ち取っている。
いかに酷いものを全国民に痛感させることとは、ストーが『アンクル・トム』を書いた目的の一つであった（モット）。

「アズ五」が『アンクル・トム』を書いた目的の一つであった。ストーが『アンクル・トム』を書いた目的の一つであった（モット）。

作品は最大の敵を奴隷制そのものとし、その不条理さを訴えるために、家族の離散や奴隷女性の苦難などを描き、

九世紀のアメリカで白人中産階級女性のあらゆる小説を出版していた、女性作家による、女性読者のための

性についての物語である。ストーは、自分の読者層が中産階級女性であることを認識し、パサシュイリ『セニ

家事の詳細や家庭内のもの事、子どもの育成、信仰の問題など、女性の日常生活を中心に描く家庭小説、

在りたるものを、家族を通じて家族の調和を崩壊させる元凶として奴隷制を描いている。

黒人男性作家ジェイムズ・ポールドウィンは、『アンクル・トム』という呼称は、「白人に屈従する黒人」という意味を持って居る。考察した（モット）。一九五〇年代から六〇年代にかけ、

奴隷制を不正で、酷いこと以上のこととは書かれていないと批判した（四九六）。
可能性である。ストーは、『奴隷制』という「家父長制」を是正するための提案として、男性の女性支配を意味する男性権力への挑戦例は見当たらない。

『アンクル・トム』は、たしかに、奴隷制を合法とする社会でくん「女性の義務は何か」を示す書として読むことができる。だが、ストーはイディオロギーを表現するためだけにこの作品を書いたのではない。敬虔な女性に愛され、彼女が「必死の覚醒」（モアズ五）をして書いたのは、生活のためでもあった。大所帯の家計は、結婚当初から、ストーが得る原稿料などには成り立たなかったという（ケリー「六九、七〇」エレン・モアズは、ストーの夫が「妻をたくさんの赤ん坊のためにもっと稼いだなら、」『アンクル・トム』にみられるような、過激な手段による物語を「購入する」読者の共感を得るため入念に施しているからだ。
1. 1. 1. 1.

□

□

□

□

□
自らの主張をキャシーの説明によって要約し、作品の結論にしたといえるが、男女の世界の対立を明確に示すデーター《アンクル・トムの小屋》は、それ以前の章で表れた対立関係を総括するものである。

『アンクル・トム』には、アメリカが産業資本主義に変換する過程で形成された、性差によって活動領域を限定する価値観が明確に示されている。十九世紀のアメリカでは、産業資本主義の発達によって中産階級が生まれると、その階級に属する女性の「適切な領域」を家庭とする価値観が主流となった。男性が家の外で熾烈な生産活動を強いるなか、女性は家中にあって「信心深く、性的に純粋」である男性を癒し、世俗的実利の追求に汚れた男性を謳歌するというものである（ウェルター151）。

一方、自由競争に疲れた男性を癒し、家庭の秩序を保つ名目で、とくに女性の男性への服従を誇ったという（コット151）。

性別によって役割分担を明確化する価値観は、中産階級女性を上流階級の「レディ」のように、大分女性たちからの社会変革の可能性である。混血の黒人奴隷キャシーが、白人・黒人の女性と連帯していく広がるコンフィデンス・ゲームは、このような可能性を象徴的に示したものである。

モルツ、女性であるキャシーが白人農園主を瞞にかけるというゲーム設定は、権力の逆転という意味では一重の重みをもつ。
『アンクル・トム』は、作図頭から奴隷制が男の世界のビジネスであることを明確にする。
男男性が商談する姿を描き、取引する「商品」が人間であることを見せることで、奴隷制が彼らの金儲けの手段に過ぎないことを明らかにする。農園主は「大々的な投げ」に失敗して奴隷を手放す状況を設定し、奴隷制が十九世紀アメリカの産業資本主義経済に当然のごとく組み入れられている様子を描く。
男性たちの会話に、「商品損傷」「市場」「相談成立」などのビジネス用語が飛び交い、奴隷の運命があらわれた商談の場で決定される残酷さが風刺的に示される。「あお娘」の娘金儲け以外にはないことを強調する。
キャシーが男をかけるレギュラーは、この奴隷商人の発言を、奴隷制の存在理由が金儲けを求める権利をも、家のお召しいの差別化して考える、ケンタッキーの農園主シェルビーの女エミリは、「高い従順の宗教的感性と信仰」をもって理想の姿を示す。農園経営に勤しむその男は自分にはそうわけではない「宗教心や慈悲心」という「美德」を求めるだけど、人分もっていると思い、自分も天国に行けると信じている。妻の関係は、当時の女性誌や新聞、宗教的バンプレット、牧師の説教などに頻繁に表れた夫婦の「あるべき姿」を反映する（ウェルター「五人」）。
だがエミリは、夫の経済的危機によって、奴隷に愛情を注ぐことで奴隷制の悪に「メキシをかけていた」自分の「愚かさ」を思い知る。キリスト教徒の「義務」として、奴隷たちに「家族、親子、夫婦の義務」を教えてきた。
農園の場所を「奴隷制のもっとも穏やかな形態がみられる」ケンタッキーと特定し、そこでは「爆発的な奴隷所有者の「忠実な」奴隷との関係を「家父長制の詩情あるもの」にまつびやげる傾向があると指摘し、ジェルシーはシェルビーの経営不振によって悲惨な運命に直面する二人の奴隷に焦点を当

際、人間の全体がんなにするように「主人」と「奴隷」とのあいだに深い愛情関係が存在することを認めながらも、生身の人間を「主人」の所有物とみなす法律のもとでは、その愛情関係が永遠に保たれることを明らかにする。夫の経済的危機で自らの存在理由の破綻をきたすが、表面的には変わらぬ生活を続けることができる。同様の経済依存と主従関係を「法律で規定されている」と奴隷たちは「主人」が借金をすれば、その身をもって返済しなければならず、家族離散を余儀なくされている。

シェルビーの経済力に依存し、彼を「主人」とみなすことを「慣習として期待されている妻、彼の経済的危機を、『法律で規定されている』奴隷たちは「主人」が借金をするならば、その身をもって返済しなければならず、家族離散を余儀なくされることで、男の金儲け手段としての奴隷制が岸の世界を蝕むさまでより具体的に示す。}

二人の奴隷とは、奴隷商
トムの生活やその風景は、物語の中心に位置する。トムはアフリカ黒人の特徴を顕著に示す男性であるが、当時の白人中産階級女性に謳われた敬虔、従順などの「美德」をもって奴隷制に対処する（バパスウェイ・七三）。この意味で、彼の価値観は世界のものであり、彼は彼の受難とは、スキンスが女性の世界に影響を与える例とみなすことができた。黒人男性が白人女性の勤労を実践するというトムの性格設定は、白人女性読者の自己投影を容易にしたかもしれないが、一九〇〇年から六〇年代の公民権運動の時代には『アンクル・トム』と呼ばれるくらいならば『ニガー』と呼ばれる方が正しかったという風潮を招く大きな要因になる（ファース・八 小林憲一 五四七）。

トムは「主人公」の決断を默認して自分の家族と今生の別れをし、イライザは幼い子どもを守るために「主人公」への子どもが売られた姿でもある。キリスト教徒の母親として子どもを育てるよとはミリミリに教育されたイライザは、そした経験を正当化する道具として利用されたことを痛感的に示している。ストーがとらえられる奴隷制の女の世界への浸食は、主に性的虐待であり、母性愛の蹂躙であり、究極的には家庭の間の秩序を正当化する道具として利用されることは鉄板的に示している。イライザは「主人公」夫妻への忠誠よりも子どもへの愛情と義務を優先するが、彼女の発言は、宗教が人間にし
奴隷制に打ち勝つ屋根裏の女詐欺師 □ ストー『アンクル・トムの小屋』

他方カナダで自由を勝ち得て家族の結末も強めるというように、対照的な運命をたどる。ストーは「人の苦難の道程を追跡する」という連載小説の延長を容易にするパターンに従いながら、被る微みに、または彼ら以前に、奴隷ビジネスの悲惨な犠牲者となる黒人女性のエピソードを次ぎに挿入する。子どもと別々のところに売される女は、後にその後の老女の話

奴隷制である。

奴隷ビジネスが「女の領域」において、ある点を正当と考える加害者にまで浸透する。ストーは、トムの三番目の「主人」オーガスティン・セント・クレアの妻マリーヌをとおして、奴隷ビジネスがその「利益」を消費する。女性にまで悪影響をおよぼす様子を描く、マリーは、奴隷制を当然とみなす環境のなか、どうしての手をやるのが「おまけ民族」ゆえに彼らを「抑えつけ」自由中心的ところが黒人の欠点であるとその攻撃をゆるめない。「卑しい民族」ゆえに彼らを「抑えつけ」自由の立場をわからせなければならない」と主張し、娘のエヴァが彼らを平等扱いすることを嘆きをする。
奴隷制を合法としている限り、ミシシッピ河と太平洋のあいだの広大な地域が人間商品の一大市場とし

すばらしく、奴隷制を合法としている限り、ミシシッピ河と太平洋のあいだの広大な地域が人間商品の一大市場とし

連なる男性を描く。農園主の息子として奴隷制のなかで成長した彼は、「ペテン」と称する知的エリート、セ

ト・クレアをとおして、世襲によって奴隷ビジネスにかかわる男性の苦悩を明らかにする。彼は、人間の肉体と

精神を取り扱う投機師、飼育人、奴隷商人、仲買人を生みだす南部を、「地獄に取り憑かれた世界」と呼ぶが、

その現実に「できるだけ目をつぶり、心を無感覚にして日々を過ごす」辛く汚く、不快なもののはなんだれ

運営をしているレギリオ、ストー「アンクル・トム」で描く男の世界のさざやかな良識を代表する。

奴隷制の罪を深く認識することによって、

彼には変革の可能性が残されているからである。
世界的グロテスクさを物語る。トムの最後の「主人公」である彼は、人間の肉体だけでなく魂をも完全に権力で所有しようと。魂の自由を主張し続けるトムを殴り殺す。ストーは、レギーレのような農園主を生みだし、その存在を行法とする男の世界の価値観に、その被害者キャシーの「激しい誇りと反抗心」を対抗させることになる。キャシーは勝利を得るが、その勝因は彼女自身の心の改革であり、女の世界の結末にある、男の世界で生みだされた奴隷制。女の世界ではひどい状況、男性自身も切れる状況をくり返し描いてきたストーは、キャシーの詐欺を成功させることで、作品の結論を示している。その結論は、キリスト教の愛を基本とする女の世界の体験によって、社会に変革をもたらすことができるということもある。十九世紀のアメリカでは、女性が人種をこえて結び、主観性をもつ要求を、キャシーは復讐を果たすことから解放され、愛のために詐欺を働くにあたって、心の改革を行っている。キャシーは、レギーレの詐欺で、恋人を死別した彼女であるが、レギーレへの詐欺は故郷の道を復讐のためにの有効な手段にもなる。}

『広い、広い世界』などでは、キャシーはレギーレの農園を破壊するための詐欺を働くにあたって、彼女の手で破壊者に復讐としてお返しする。キャシーは復讐を果たすことから解放され、愛のために詐欺を収めることに、心の改革が行われる。キャシーが目撃し、その手で受けた詐欺は、キャシーの詐欺が成功する最後のadoras。
奴隷制に打ち勝つ屋根裏の女詐欺師 ○ ストーカンクル・トムの小屋

の鍵は、彼女がエミリーへの愛情に目覚め、その愛をつくることにある。エミリーと母娘のような愛情関係を

結ぶことで、キャシーが自由を得て生きる希望をもつことになるからだ。レギリーに復讐して「自爆」する、とい

う想望から解放されるのである。

キャシーの心の改革は、ストーカンクルが主張する女の力による社会変革への第一段階を示す。すべてを乗り越え、い

うでも愛し祈ることができれば、闘いは終り、勝利は得られる」と説くトムの援助によって、キャシーはが自らを変

えた。敵を懐む復讐することの非を諦め、「邪悪なものは生きていよいものである」と言うトムは、キャシーを愛

にとづく女の世界に引き入れ、「正しく感じる」ように仕向けたことになる。トムがキャシーに説く「正しく感

じる」重要さは、ストーカンクルが「アンクル・トム」をつづじにして女性読者に訴えたことでもある。キャシーはトムの忠告

と題した一文を寄せている。奴隷制の地域拡大を許す「カンサス・ネブラスカ法案」が上院で採決される前夜のこ

とである。その記事においてストーカンクルが「アメリカ女性の第一の義務は、個々の女性が（奴隷制拡大の一）問題を自

分の力で完全に理解し、母、妻、姊妹として、または社会の一員として、自分の影響力を正しい側に行使すべきだ

と感じることだ」と訴えている。この主張を裏づけるのは、国家の危機や一大事に際して、女性が強い影響力を発

揮できる、というストーカンクルの確信である。

この確信は『アンクル・トム』をつらぬくものでもある。妻に奴隷売買の卑劣さをなじられ、良心の呵責を感じ

妻に奴隷売買の卑劣さをなじられ、良心の呵責を感じ
ANUKUL・TOMの小屋

一が自ら変化し、他を変化させたことはしばしばある。

母親の力を光に、社会の不正に挑戦できるかは、ストーの主張は、セント・クレアの母親の例に示される。セント・クレアは、自分の教育について、母は、私の魂の内容が、母と断言する。

一は、ビジネスの見方で、母の過酷さに、母の教育を、毎日、ストーは、母親の教育で、社会を変革の可能性を示す。[3]

一の考えと感性で、自分の子供をし、セント・クレアの双子の兄をとおし、ストーは、母親の教育で、母の教育を、母親の教育で、社会を変革の可能性を示す。[3]

息子たちの奴隷制を、おもわせるために、母の力で、母の教育を、もたない。

奴隷制は、ほこるのを見逃すことはない。

ストーがこのように、母親の力を、家主制に、組み入れられた母性神の価値、
観と同様ではないのか、という疑問が生じる。母親が子育てをおこして社会に与える影響力を、国王や軍隊、政治家の

強い影響よりも強大である（メルダー九）とまつりあげ、女性を家庭という「適切な領域」に押し込めた価

値観である。男性支配社会を維持する便利な手段として、母親個人のなかに宗教的な、道徳的美徳を求め、特に名誉（メルダー九）とみなした価値観は、

ストーのなかでのどのような位置を占めていたのだろうか。この緊密に対する答えは、ストーのただしする母の力が「男の領域」の価値観と対立関係にあるという一点によっ

て説明できる。エミリーにしても、セント・クレアの母親にしても、男性支配の最悪の形態としての男

性父権を維持するための「制度としての母性」とは異なる。生み育てる者の喜びとなる母性である。四一

エミリー・セント・クレアの母親を支えるのは、キリスト教の教義にもとづく、虚けられた人びとへの深い同情

の念であり、人間の尊厳への限りない畏敬の念である。彼女たち、ストーにとって、利益追求を第一義とする農

園主に追従し、奴隷制擁護の説教をする牧師たちの対極にいる真正正経のクリスチャンである。四二

クル・トムの最終章で、「女性たちへの訴え」同様に、奴隷制廃止のために一人ひとりができることは、正しく

感じるよう気をつけることだ、と訴えている。エミリーとセント・クレアの母は、文字どおり、ストーのこの訴
見を捨てきれない矛盾を抱えている。だが彼女は「キリストのように愛に満ちたエヴァから教えを受けて」
その偏見を克服し、「正しく感じる」力を持つ。投機師に商品として育てられ、抑圧、従属、無知、苦役、悪徳の歴史から生み出されたトムシーを、一つの魂は世界中のお金を集めたよりも尊い」という「キリスト教の教え」に則って育てる。オフィリアもまた、ストーカの考えると考えてなんでもある。
彼が母なる母を自ら育てていることは、作品の至るところで確認できるが、彼の死に立ち会うジョージ・シェーンとの関係にもっとも顕著に表れている。彼はかつての「若主人」ジョージの心に社会変革へのたしなみな決意を誘生させることで、母なる力をもつことになる。この力は、彼が男の世界の金と権力に肉体を蝕まれながらも、女の世界にその魂を奪う。キリストの愛を誇くことで発揮される。
ジョージの精神形成は「宗教的な心が自ら育む」ことである。彼がもったトムによってなされている。トムは、少年ジョージとの別れに際して、「女性のように優しい声」で、「ほとものの紳士道」を説くが、その根幹は「お母さんのようなキリスト教徒に近い」という決意。その後この決意を実現するからで、彼女に「血を流すような罪を犯さない」方法を提案するトムによって、彼女への愛情と祈りを取りもどす。トムは、彼女に「血を流すような罪を犯さない」方法を提示する。
キャシーの詐欺戦略の基本は、レギリの「迷信を恐れる傾向を利用すること」である。ストーカーは、その傾向を不信心からくる弱点としてとらえ、強い信念心に支えられたレギリの確固たる態度と対比している。宗教を利用した黒人や女性を下位におくシステムを作りあげた男の価値観は、その究極を実践するレギリには、自演の宗教をもたないために、自滅への弱点となる。キャシーのコンフィデンス・ゲームは、彼女がレギリのその弱点を利用することを考えていた時点ですでに勝利に向けて機能し始める。彼の恐怖はその心のうちに生みだされるものであり、カワシで脱走の機会をつかないで幽霊として動かず、というもののである。脱出にあたって「クレオール系の貴婦人」に変身すること、自由利までの運賃をレギリからせめることで、キャシーは自らの詐欺を基本とおいたレギリの迷信恐怖症を煽るために、キャシーは死んだ女性たちと連絡する。その連絡によってレギリの悪を裁き、その悪に人生を葬られた女性たちの無念をも晴らす。キャシーは、まず、黒人女性が殺された屋根裏で風の音が「恐怖と絶望の叫び声」に聞こえるというのがキャシーの目論見である。「残虐な殺人や幽霊、超自然現象の声が「恐怖と絶望の叫び声」に聞こえる」というのがキャシーの目論見である。
象などの説を集めた本をレギリに読ませて、彼の迷信恐怖症を募らせという心理作戦さえ施す。 彼女が発する「狂気」のビーム、 レギリを「支配し」恐怖を駆りたてる役割を果す。 彼女は「ある種の狂気によって、 陥ることを知りながら、 キャシーは「この世のものとも思われず、隠せることを確信させている。レギリの不興を買って屋根裏で横たわった奴隷女性が、どのような人物であったかもわからず、その名前を問うこともなかったが、彼女の後ろに無数の犠牲者がいることを容易に想像させる。キャシーは、金儲けを意とする男性の「性的商品」にされた黒人女性の歴史を背負って何もかもに闘うことを底下、彼女を対面して、屋根裏の幽霊の存在を確信させている。

キャシーは、自らの人生をまっとうできなかったすべての母性たちの過去をも連帯する。 彼女が運営するのは、 ストーが理想とする母性の要素をそなえているから、その理想を男性支配の世の中で実現できなかった母性たちで
ストーは、イラストの逃亡を助けるレイチェル・ハリディをとおして理想の母娘像を描いている。彼女は、妊娠のための休息と彼女の心をリーダーにし、郎か、その愛と想いを託すのである。「母さんは決してそんなことは考えなかった」と、父親は母親の価値観を息子に伝えるメッセージでもある。

心をリーダーが代表する価値観において母娘の関係を重視している。父親の態度も、レイチェルの母親関係において母娘の関係を重視している。父親の態度をとおして、母親たちの念願が込められている。キャシーもリーダーの母親が、レイチェル同様の慈愛の心をもって、外の世界を理解して母娘の関係を重視している。父親の態度は、レイチェルの母親関係において母娘の関係を重視している。父親の態度をとおして、母親たちの念願が込められている。キャシーもリーダーの母親が、レイチェル同様の慈愛の心をもって、外の世界を理解して母娘の関係を重視している。
この合体がレグリーを破滅に追い込むことは、endoの価値観による社会革命を実現することでもある。レグリーは、

トムが持っていたエヴァの遺髪をみて、燃やしてしまった実母の遺髪を思い出し、死んだ母からの拷問を受けることになる。「罪の生活」を洗わしようと死ぬまで努力し続けた母の愛が、レグリーの「罪にまきれた悪魔のよう

やわらかく冷たい手」を代表する彼女の生体の肉体は、

幽霊の存在を実感され、レグリーの拷問によって殺された彼女自身でもある。「レ

ルパート五十四」。彼女の性格できわめの怒しい情熱の化身である。

彼女は「心の優しい天使」となる。「私のなかに悪魔が住んでいる」と彼女がレグリーを威嚇するが、

那麼したレグリーの屋敷を徘徊するのは、すらりと背の高いキャシーそのままである。

その一方、キャシーが幽霊になることは、

自らを再生させるための儀式でもある。彼女は「ほんものの幽霊」に

なる前に、レグリーの「厳しさと冷酷さ」に負けて「硬化した」自分の罪をあがなっている。それには、エメリーと
屋根裏に「家庭」を築き、トムの愛情に応えて祈りを回復する、という「優しさ」を取り戻す形で行われる。
キャシーは「農園にいえば、鳥におちてしまう」というトムの助言を得て、自分からレギリーに置いておくが、
彼女はこの儀式の直後に、新しい人間となって自由の地へ旅立っている。
キャシーは、自分がトムに絶対になれないほど卑しいとみなしている。トムが中産階級女性に課させられた
ヒロイン（アモンズ）七二」として描かれている一方で、キャシーは「悪魔としてのヴィクトリア朝の女性の
典型」（ナルドン）一三一」ともいえる。
「悪魔」であるレギリーが、彼女を「惡魔」と呼んで恐れるのは、狂人のような支配欲を発揮する激しい
抵抗心や、かつての「主人」を殺そうとし、自分の子どもをも殺した攻撃性である。キャシーは最終的にはトム
の世界に入られられてその罪を許されているが、そのゲームは依然として「気の強さ」という感情が強く残る、
キャシーが示すのは、ストーリーの感情が「そうしたい」と願う改革である。ストーは、キャシーの詐欺を「クーデタ
新聞連載小説から女性向け単行本小説へ

ストーリーは、奴隷制を象徴する世界のビジネスが生みだしたものの一つを、女性の世界で、女が世界のビジネスが生みだした商品となることを目指して書かれた。ストーリーは、市場を形成して、大量の読物を消費者として消費するようになるが、収入の道にもなり得るようになったのである。

キャラクターの人物像やそのコンフィデンス、ドラマは、明確な社会的なメッセージを伝えながら、同時に、女性に対するマーケットを意識して書かれた事情を強く反映するものとなっている。

ストーリーは、生産単位の必要な構造と遅れて出てきた職業作家であったが、このことは『アンクル・トム』の生成と深くかかわっている。生活費を得ることが目的であるならば、売れる工夫が芸術性の追求に優先され、読者の需要に応える努力が何にもまして要求されるからだ。『アンクル・トム』は、まれでありながら、このような工夫と努力の賜である。

物語は、もともと奴隷制廃止の立場から出るワシントンの週刊新聞『ナショナル・イーナ』に連載され、読者の需要に応える努力が何にもまして要求されるからだ。奴隷制の問題に関する記事だけでなく、詩、逸話、手紙、短編などの読物から、地元のニュース、世界の出来事、他の新聞の内容を四ページの紙面に盛込んだ新聞である（シルヴェスター・ナサニエル・トム）
さくらの花びらに、春の訪れを告げるか、明るい色の花びらが舞い散る。花びらは風に舞い、地に落ち、再び花びらに生まれ変わる。春の訪れを感じる、さくらの花びら。
ニュース 芸術 創作などの「教養」を身についているという設定もあり、白人女性読者の共感を呼ぶためのしかけであ
る。見ただけでなく、その前半の人生が白人女性読者にとって似ているほど、その後の人生の悲惨さを
者が訴えるからである。父親の死とつぜん始まる奴隷人生の不条理さ、同胞を生むと同時に、奴隷制
反対の強力なメッセージとなる。自分の子どもを殺すその行為も、それが愛する子どもを奴隷制から
保護する方法であること。『女性だけが許すことができる』（バブル』）七三）のものです。

作品中、もっとも過激に奴隷制への苦境を強いるジョージ・ハリスは、白人と変わらぬ容貌と「主役」以上の能力
をもつ身ながら、奴隷としての苦境を強いられている。キャラクターが語る上での一例においても、中産階級の価値観が明白に表れている。彼女は白人の父親に「人形のように
なきわめきの服を着せられ」周囲の人々にその可愛らしさを讃えられたことを、好ましい経験として語っている。身
の死後、彼女は「デルで白人男性に買われたが、事実は、彼を愛していた」という理由で問題にはならない。

ジョージ・ハリスは、再会後の妻のイラマに向かって、「男にとって自分の妻と子どもが自分のものですと思える
ことはなんと幸せなのか」と言わし、奴隷制度によって「主役」の所有物になることを強制する人権侵害を強破しな
がら、女性を男性の所有物とみなす中産階級の価値観を理想としていることになる。キャシーも、この点において
ジョージと共通している（ジェリーティヘイ）。

『イーラ』は、十九世紀末に起こったヨーロッパ諸国の民主化運動のニュースが掲載されたというが（スミス
奴隷制に打ち勝つ屋根裏の女詐欺師　ストー『アンクル・トムの小屋』

七五三、ストーはそれをジョージたち奴隷の自由への逃亡と結びつけて描いている。新聞で報道されたニュースの内容と物語の内容を関連させるなどで、読者の共感を得る努力をしている。四ページからなるニュースには、このような政治ニュースとならんで、女性読者に向け、「よき妻」になるための指南が掲載されていた（シルヴェスター、アンクル・トム）が、このようなニュースに連載された物語であれば、ストーは、レイチェルが母権主義を実践する場所を、彼女がクリスト教文化のなかで「安全」を保つ方策である（アスケランド、セだけでなく、故郷の美しい大きさを守るために、絵画を描くようになる）に、超自然的な風景のレギュラーを追いつめる。彼女は、悪魔退治をするスーパーマンになることで、「女悪魔」の名を返上することができる。人生を押し広げる苦しみによって狂気と絶望に陥った（という説明は、「彼女の反抗心や攻撃性を正当化することにもなる。

『アンクル・トム』が読者の必要として密接な関係をもって書かれた物語であることは、コンフィデンス・ゲーム終了の展開にも表れている。イライザがキャッキーの生き別れた娘であるという都合のよい偶然なこと、読者が喜び、驚き、感動、感動を覚え、感動を覚える。
奴隷制に打ち勝つ屋根裏の女詐欺師・ストーリー『アンクル・トムの小屋』

でも、社長の妻の説得で応じたという。女性による、流行らないテーマについての小説は危険が大きく、いったん出版を断られた『アンクル・トム』が巻き起こした騒動は、『イーラ』の読者がいまだに受けた影響とは比較にならないほど大きいものだったが（モット・イ）、その陰で働くための努力が最後までなされた事実も見逃せない。

読者が最後に見にするキャラクターは、再会を迎えた娘イライザの影響を受けてクリスからの教徒になり、小さな娘を抱く「若きおばさん」としての姿である。読者の喜びフローハンドの演出としても、激しさを失ったキャラクターの変貌ぶりには拍子抜けの感がある。男性に支配される怒りを自由へのエネルギーに転化させたキャリーの魅力は、愛の美名のもとに家父長制に取り込まれたままになるのではないか、という疑問も起こる。

だが、奴隷制の呪縛をコンフィデンス・ゲームによって能動的に切り抜けたキャリーは、女性から自立したキャリーと、男性から自立したキャリーは互いに強く示している。レギュラーに虐待されたpeatedis・ゲームによって顕著に切り抜けたキャリーは、彼女だけでなく、農園経営に力を発揮するエミリーナなどにも共通するものである。してみれば、キャリーが孫娘を抱く姿は、奪われた子育ての喜びを取りもどそうとする後の向きのものだけではなく、女性の権利が奪われるものではない未来へ向けられていると解釈すべきかもしれない。

彼女の表情は、かつての絶望やつ拉丁の説得で応じたという。女性による、流行らないテーマについての小説は危険が大きく、いったん出版を断られた『アンクル・トム』が巻き起こした騒動は、『イーラ』の読者がいまだに受けた影響とは比較にならないほど大きいものだったが（モット・イ）、その陰で働くための努力が最後までなされた事実も見逃せない。
「ストーリー」は、「ストーリー」という呼び名で有名であるが、この事実こそが當時のアメリカで流行されたストーリーのヒッパルキーロを示す。

ウェンディの女性について研究している歴史家は、「五五五年代に起こった「象徴的変化」を発見している（「ウェンディ」）。

注

ストーは「ストーリー」という呼び名で有名であるが、この事実こそが當時のアメリカで流行されたストーリーのヒッパルキーロを示す。

引用文献

（1）

（2）

（3）

（4）
1800年から1930年の間、日本には平時は農業が主で、戦時になると軍需生産や工場経営が増加した。1860年頃からは世界市場とつながり始め、経済が国際化を進めている。

1865年には、米国からの影響で自由貿易の思想が传播され、日本でも開国政策が決定。1868年の明治維新後、国際貿易の枠組みが整備され、経済成長が見られることとなった。
奴隷制に打ち勝つ屋根裏の女詐欺師 『アングル・トムの小屋』